2023年8月6日　主日礼拝

説教題「正義と平和は口づけし」詩編 85 編 9～14 節

主任牧師　加藤　誠

「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」（詩編85編11－12節）。

「神は平和を宣言される。私たちが愚かなふるまいに戻らないように。私たちの間で平和を祈り求めてやまない、この神の宣言を聴き取っていこう！」という詩編 85 編は、「主なる神の平和の約束」と表題をつけることができる信仰の歌です。

この詩編 85 編が生まれたのは、イスラエルの人々がバビロン捕囚から解放されて祖国に戻ってきた時代でした。イスラエルの人々は、主なる神から与えられた約束の地を失います。神に背を向けて偶像礼拝（物質的な豊かさを追い求める信仰）に傾く罪を犯したために、バビロン捕囚という苦難を余儀なくされたのでした。しかしながら 70 年後、神はその怒りを鎮めて、大きな赦しをもって自分たちを再び祖国に戻してくれた！…と、イスラエルの人々は喜びあふれて祖国に戻ってきたのですが、目の前の現実は大変厳しいものがありました。捕囚から戻ったばかりの貧しく小さな人々にとって、荒れ果てた祖国の再建は大変な難事業であり、周囲の人々の妨害もあり、彼らは疲れ切ってしまいます。そしてつぶやきます。「なぜ神はこんなに努力している私たちを助けてくださらないのか。神の慈しみはいったいどこにいってしまったのか？」と。神の約束と信じて、思い描いた夢と期待が大きかっただけに、その失望と挫折感は深いものがありました。

しかし、その時に一人の人が立ち上がって、人々に語り始めるのです。9 節です。「わたしは神が宣言なさるのを聞きます。主は平和を宣言されます…」と。自分たちの目の前には荒れ果てた土地が広がり、自分たちの努力はなかなか実を結ばない。体には疲れが積み重なり、心は折れ、「自分たちは何のためにここに戻ってきたのだろうか？」とのつぶやきが日増しに大きく膨らんでいく。けれども、あのバビロン捕囚の最中に私たちは預言者エレミヤを通して主なる神の「平和の約束」を聴いたではないか。「わたしは、あなたたちのために立てた計画を良く心に留めている。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである」（エレミヤ 29：11）と。確かに目の前には大きな困難が横たわっているように見えるけれども、主は平和を宣言される。私たちを必ずや平和に導かれる神の計画に変わりはない。この主の平和の約束をしっかりと握りしめて、「慈しみとまことが出会い、正義と平和が口づけし、まことは地から萌えいで、正義が天から注がれる」という「神の国のビジョン」を望みみていこうではないか！…と。

多くの人々が、神の平和の約束の実現なんて、夢のまた夢さ…と、諦めの中に沈んでいく中で、一人の人が立ち上がり、「主なる神の平和の約束」と「神の国のビジョン」を語り、高らかに賛美の歌を歌ったのが詩編 85 編なのです。

わたしはこの詩編 85 編を改めて読みながら、イエス・キリストが私たちの間で

実現された「神の国の平和の食卓」というビジョンを想いました。主イエスが生きられた時代というのは、ローマ帝国の過酷な植民地支配を受けて、豊かなのはごく一部の支配層だけ。圧倒的な庶民の多くは貧しさの中に疲れ切っていた時代でした。そして旧約聖書の戒めによって、その庶民たちも、戒めを守っている人と、守れていない人とで分断し対立させられていました。障がいや病気を抱えている人や、徴税人や羊飼いたちのようにケガレタ仕事をしている人たちは「罪人」とレッテルをはられて、軽蔑され、差別されていたのです。けれども主イエスは、神さまが私たちを招いておられる「神の国の食卓」は、障がいや病気、職業に関係なく、どの人も「神の子」として尊重され、同じ祝福を分かち合う「喜びの食卓」であること、お金や力を持つ人の声が通って、力の弱い人の声が無視される「偽りの正義」ではなく、一人ひとりの声が大切に聴かれる「神さまの正義」によって、みんなが安心して食卓につける「平和の食卓」であることを示されたのでした。

この主イエスが指し示された「神の国の平和の食卓」のビジョンから今の私たちのあり様を見るとき、どうなのでしょうか。私たちは自分たちの姿が見えているでしょうか。

このたび『聖書教育』8月号の巻頭言の岡田有右牧師の巻頭言を読みながら、私たちの姿は、神の国の平和のビジョンから、なんとかけ離れていることか…と考えさせられました。岡田牧師に了解をいただいて、週報の巻頭言にその一部を掲載させていただいたのですが、二段落目の部分、「日本がどこに行こうとしているのか。沖縄からは日本が見える。神が問われる。『捨て石にされた者の声に、耳を傾けた者がいるか』」の一文に、胸が突かれます。少なくとも「わたし」は、捨て石にされた者の声に耳を傾けようとしていない。「神の国の平和の食卓」のビジョンから、ほんとうに遠い自分の姿を示されます。

それに対して、その次の三段落目で紹介されている「おじい」が望み見ている神の国の平和のビジョンの力強い言葉に撃たれます。「おじいが言う。『戦争・コロナ・災害と絶望の時代をどう生きるのか。しかし、キリスト者には神さまと交わり祈ることのできる特権がある。敵と思っている国や国民が悲しむことを望むのではなく、隣人と隣国と支え合って共に生きる。事柄は暗く厳しい。しかし、そのことで集められた私たちはかけがえのない関係で結ばれる』」。私たちは、この「おじい」が語っているように、キリスト者に与えられている「神さまと交わり祈ることのできる特権」をどれだけ用いようとしているでしょうか。

岡田牧師は語ります。「『平和を実現する人は、幸いである。その人たちは神の子を呼ばれる』（マタイ５・９）。『平和を実現する人々』とは、隣人を大切にし、互いに尊敬しあい、違いを認めつつそれを超えて、共に神の国を目指す人々。ここに絶望の時代を生きる希望がある。」

主イエスが私たちの間にはっきりと示してくださった「神の国の平和の食卓」のビジョンを望み見つつ、絶望の時代を生きる「希望」を大切に受けていきたいのです。